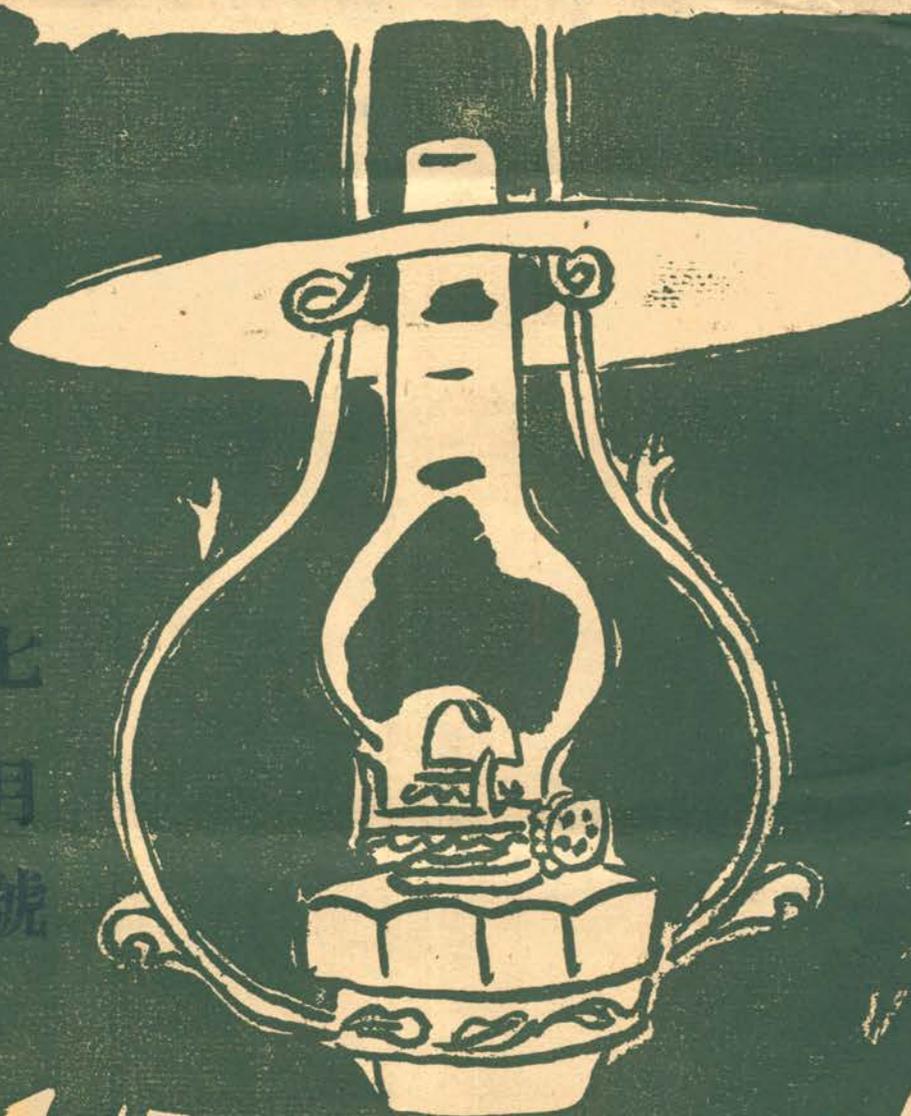


麻生路郎★主宰

創刊大正十三年・通卷二百五十六號

昭和廿二年七月一日 第三卷第廿五號
昭和廿三年七月一日發行 第三卷第廿六號
(每月一號一日發行)



七月號

Persej fugus trans lu sand - liman

No. 256





續川柳講座

(16)

麻生路郎

川柳を表現する

文字に就て

川柳を表現する文字と云つたところで特別な文字が使用されてゐる譯ではありませぬ。表現せうとする内容を出るだけ作家の意圖通りに讀ませやうとするためには多少とも、文字の使ひ方に就て特別な苦心を拂はねばならないのであります。そのことに就て少しく述べて見たいと思ひます。

「柳樽」や「武玉川」のやうな古句集には、誤字や脱字や當字が多いので、そうした表現上の文字に就ては全然無關心のやうに見えますが、必ずしも無關心だとは云へないのであります。

例へば「夜」と云ふ字に「夜」を片假名の小さい「ル」を附けて、「よ」と讀むか、「よる」と讀むかを區別させて居ります。

大いそいなせきばらいする大がらん (柳樽八篇)

の「大い」の「イ」も「たい」と讀ませるために附けたもの

であります。斯うした例は幾らでもあります。

しかし、濁音の點が落ちてゐたり、今日の當用漢字の新聞を讀んでゐるやうに、熟字の一字が假名で、一字が漢字だつたりするところを見ると現代の作家のやうに、文字に對して特に神経質でなかつた云へるのであります。兎に角、間違ひのないやうに讀ませることが本位で、そうした送り假名をつけたのであります。尤もこれは作者がつけたのか、句集の編纂者がつけたのか、作者がつけたのもあり、編纂者がつけたのもあるのかも知れませんが、間違ひのないやうに讀ませる目的で、こんな表現をしたことには間違ひないのであります。

前述の「大いそう」にしても、特に斯うした表現をする必要はないと思ひます。むしろ「たいそう」と全部平假名で表した方が穩當ではないでせうか。

しかし、句によれば、そうした特別な注意が必要だつたのであります。古句に使用された文字を分類して見ます

と、假名ばかりの句、假名を多く使用した句、平假名と片假名を混用した句、假名と漢字を混用した句、漢字ばかりを用いた句など、いろいろありますが、前後の關係上讀み易いやうに片假名を挿入したもの、又は特に注意を喚起したいために片假名を使用したものであらうと思はれる程度であつて、それ以上文字に對する深い省察が行はれたとは考へられませぬ。

右に述べましたやうな觀點から、現代作家の句に就て文字の使ひ方を検討して見ることにいたします。

先づ平假名ばかりで表現された句の例として

ひるふかし
いひたいこと
いふてゐる

(路郎)

を擧げて見ませう。句は「須磨雜觀」の中の一語で、この句は全部が平假名で表現されてゐるばかりでなく、三行に配列して發表して居ります。それは句を鑑賞する上に、ゆとりを求めてゐるのであります。いささか贅澤ではありませんが、私の考えでは句と云ふものはそれ／＼の内容に従つて一行のもの、二行のもの三行のものど云つた風に發表するのがホントだと思つてゐるので、紙面がゆるす時には、それを實行して來たのであります。従つてこの句は三行に

して發表してゐますが、これを一行にいたしますと、いささか讀み易くなり、漢字を入れて讀み易くすると、漢字からうける刺戟が強すぎて、この場合、作家の持つ感覺がそこなはれるやうに考えられたのであります。拙吟を例に引きましたが、斯う云ふ考え方もあるといふ一例に過ぎませぬ。

「須磨雜觀」(大正七年七月一日發行、「土圍子」第一卷第一號に發表)十一句中、三句が、平假名ばかりで表現され、他の句には、一字か、二字の漢字が用ひられて居ります。

古句にも

こつちでも ふるといふよと
かしてやり

ど、云ふやうに、平假名ばかりで表現された句はありますが、作者が意識して平假名ばかりで表現した譯ではありませぬ。斯うした穿ちの句になると、平假名ばかりで表はすよりも

こつちでも降ると要るよと
貸してやり

とした方が、讀みよくもあり、強く響いて効果的だと思ひます。文字の使ひ方もなか／＼むづかしいものであります。前述のやうに平假名を多く用ひる場合の効果もあるにはありますが、一面には又、あまりに平假名が多いために、同音で他の意味に解せられるといふ難もないことは無

いと云ふ欠點も知つておかねばならないのであります。

パアテンダアコップをふいてとりあはす (路生)

この句は片假名と、平假名を混用した例であります。パアテンダアは英語の Bartender であり、コップは英語の Cup でありますから、共に片假名で表はした譯であります。

「ふいてとりあはす」はわざと漢字を使はずに、文字からうける強い刺戟を避けたのであります。文字に眼を奪はせないで直接内容へ眼を向はせるのに役立つからであります。

では、句の表現にはなるべく漢字を使はない方がいゝのかと申しますと必ずしも、そ

男女両性に作用する

プレホルモン

塩野 瑞 製 藥 廣 下 注 射 ・ 錠 劑

うではありません。漢字を適切に使用すれば、句が読みよくなるし、句意が強められると云ふ効果も奏するのであります。「降ると要るよ」の句の場合がそれとあります。時には漢字ばかり羅列して句をなすことがあります。それは古句にも現代句にもあります。

次に今人の作例を示すことにいたします。

（八歩）

若旦那映画観賞會幹事

（破衣）

一步一步一歩一萬二千尺

（六文）

月給百辨當屋靴屋洋服屋

（紋太）

漢字ばかりで表現した句はかなりあります。これ等の句は何れも助詞が省略されてゐるのであります。省略によつて反つて句意は強化されて居ります。これ等の句は漢字が押しならべられただけで、内容を誇張し、その誇張によつて穿ち味が強められて居り、ただ読み下して行くに従つて情景がうかがは上つて、何んぞなくほほえましくなる句であります。

しかし、これは、少しでも川柳の表現といふものになづんだ人たちにとつては、ほほえましい句であるかも知れません。初心者から見ますと、單に名詞の羅列に過ぎない

のでありますから、とても作家に共感することが出来難い句ではないでせうか。そうした人たちのために少しく句意を解説して見ませう。

次の句は「若旦那」「映画観賞會幹事」と二つに區切つて見ます。何んでもない單純な想に違ひありませんが、若旦那らしい誇りが、そして女優さんなどに接する若旦那のイヤ味たつぷりな態度が大映しになつて來るではありませんか。人がどう思つてゐるやうと一切おかまいなしに幹事の

不朽洞句帖

麻生路郎

革靴 長髪 商工都市の地圖
世に負けて古本屋から古本屋
黄菊白菊明治の匂ひなつかしむ
元重役うすよごれうすよごれしたころ

還 曆

六十一まだ情熱は燃えに燃え
六十の次が六十一ですよ
六十一背廣の旅をまだ続け
芳紀まさるに六十一をほゝえまむ

も、何々本家であり、何々屋元祖であります。旅人の眼には、どれがホントの本家なのか、元祖なのか全く戸惑ひさせられます。

名刺をふりまはしてゐる若旦那を想ふ時、何んとなくほほえましいものが感じられるではありませんか。

本家と云ひ元祖と云へば一軒しかない筈のものが軒を並べて本家があります。作家は、そこを掴んだのであります。

第三句目の「一步一步」の句は富士を詠んだ句であります。この句のよきは遙の雲間にそそり立つてゐる、雪をいただいた富士の還姿と、一步、一步、一步と蟻の歩みを

續けてゐる麓の旅人との對照にありますが、多少格諺じみてとられるところに、この句の表現には損があります。

最後は「月給日」の句であります。これは時間的に少しく週上つて鑑賞しなれば、ホントの味を感受することが出来ないのであります。

古句が徳川時代の風俗習慣や人情や制度などを知つてゐないこと、ホントの句意を解することが出来ないうちに、この句も、この句が作られたころの世相を知つてゐないと、解釋が適切でないことになり

ます。句に一々年代が書いてある譯ではありませんから、ホントにその句の味を知ると云ふことは難しいことであり

ます。今と違つて、この句が作られた頃には月賦販賣と云ふ制度が旺んだつたのであります。そして會社員などは電話一つで、呼びつけて買物が出來たし、それも當然のやうに、支拂は月賦の方法を採つたものであります。これだけの前置をすればこの句の句意は半ば以上お解りです。

月給日になると、それ等の賣主や、店員が少し大げさに云へば殺到して支拂を要求しに來るのです。この日を遁せば更に一ヶ月支拂を延期させられるからであります。安い月給で何んとか、やりくりして來たサラリーマンにとつて、月給日は反つて厄日だつたとも云へます。こゝを掴ん

だのが、この句です。以上三句とも何れも穿ちの句であります。漢字ばかり並べた句には概して穿ちの句が多いやうであります。漢字の持つ固さが、穿ち味を強張するのに適するからであります。

要するに、川柳を表現する文字は、内容に適正な文字が使用されると云ふことになり

ます。内容の固さを表はすために多く漢字を使用する方がいゝし、内容の柔らかさを表すためには、平假名を多く使用した方がいゝと云ふことになるのであります。内容そのものを強く感じさせるために、直接眼に觸れる文字から強い刺戟をうけさせぬやうにするためには平假名を多く使用した方がいゝと云ふことに注意を喚起させたい場合や、外國語を用ひた時には片假名にすることは前述の通りであります。

時には「曲」の字に、ルビを附して「うた」と訓ませたり、「六月」に「みなづき」とルビを附したりして、いろ／＼の文字の技巧を施す作家もあります。眼に訴へる表現として、ある程はゆるされる問題であります。あまりに技巧が過ぎると、文字の遊戲に終つて、内容が空疎になる恐れがあります。そうした作家は文字の魅惑に囚はれすぎ

るのであります。斯うしていろ／＼と研究を進め行くに従つて眼に訴へる川柳の表現は完成されて行くのであります。



大阪市 武部香林

街路樹の下を燕のやうにぬけ
溪一里箕面繪になるとこ計り
疲れてる身に錢湯の湯が匂ひ
憂うつがつゞきラヂオをブツと切る

お寺さんの髪黒々とポマードに

就職に母親はもう嫁の事
ゼネストの聲明書とかや讀み切れず

兵庫縣 戸倉普天
奈良縣 上田翠光

感情を殺してゐるのに髪匂ふ
火のやうな唇だつた星あかり

人目もあらうにじつとみつめ合ひ
満ち足りた戀が夜露を踏んで去に

眞實へ何時かな戀は熟れてゆく

横濱市 福田山雨樓
雛から育てた雛をしめる (二句)

雄鶏遂に他人にしまして貰うなり
雛のころをしのであわれ夜の膳

大阪から何年振りかいゝ電話
腹撫でてこの身末世に敗れたり

尼崎市 水谷鮎美

豆の葉のふくれて老母のたつしやな日
たんぼゝやすみれむかしをとりもどし

隣席のセルの羽織をなつかしみ
瓶さげてゐれば酒かとたづねられ
亡父若き日に彫みしか古机

奈良縣 西垣錦風

友もまた生きてるだけの姿なり
別荘へ附いて番人身賣りされ
失戀の事も云ひ出す春の夜
フト妻と出ればデパート休業日、
同權の顔で女房は向き直り

大阪府 川村好郎

市民住宅映画セツトのやうに建ち
ポケットも掃除が出来た待ちぼうけ
納税の惱み電車を乗り過し
やりくりのうまさ妻に聞かせとく
むさんこに金が欲しいと思ふ晩
案の定掛けが寄らない旅歸り

山口縣 岡村路三

蟹喰べて死んだ話へ手を止める
紙屑の様な市場の籠の錢

大阪市 稻葉鳩花

だまされて居るとは知らず指環くれ
腹も立つお金もほしい日が續き

プランはあくまでプラン櫻散る
蚊一匹夏を知らせにやつて來た
アチラ製のバスで春風を切る
その昔命をかけた勳八等

名古屋市 吉田水車

可有忌

柳樽しつかと拘いて可有の忌

戦狂結審

パスの窓武士の情に觀る櫻
肩章のない軍服へ春寒し
小心の少うし闇もしてこまし
間髪を入れず綿菓子製造機
心天水の下で恐れ入り

賽銭のやうに置いておく電話料
出雲市 尼 緑之助

バスガールはみ出て春の風をさり

城崎温泉にて

橋と柳各々影をもつて春
養母の一周忌
孝養の足らぬまんに一週忌
新日本二合八勺にも近し
わらびの候君もか僕も藥瓶
日に月にルンペン色に染る我れ
子寶のどれもが親の意に逆き
これからもあることチツブ出しときや
人の名が思ひ出せない歳かいな

大阪府 市場波食子

胎教と言ふに朝からガミガミと
ぬれて行くには軍服が役に立ち
雨の日ははく靴がなく本をよみ

滋賀縣 北川春巢

仁術と云ふを税務署容赦せず
ほめ上手ミシンの音もほめて去に
モダン婆などゝ呼ばれてタイム讀む
おしめだけ残して空巢持つて行き
見習技師として卷尺はいつも持ち
ブツチアケを見に驛前の子は走り
再婚をすゝめるように母もなり
夢も見ず百万圓の夢も見ず

大阪市 木下幽王

俗談と別な聲してお経あげ
愛情も枯淡を見せる老夫婦
結末はみんな政府のせいにする
腹たてゝ歸れば何も知らぬ妻
世話好きのあんじよう道具にされてゐる
妻にだけ聖者の様な事を云ひ
社長より五寸も高く気がねする
琴を弾く女の顔が神祕めき
深刻な顔は女を待つ顔か



奈良縣 尾崎方正

電車事故すぐ忘れませうらゝ
大空へ背延びしてみる花曇り
濕氣含んだスフの如くに眠りこけ
ちぐはぐに着てのし歩く若きなり

二日酔手巻の煙で夜が明ける
組合のいろはを知つたゞけでスト

廣島縣 弘津柳慶
交叉點ピリ／＼と叱られる
日光全京職大會出席

生んがための討論へ灯がともり
民主々義家康公も煙たかる

大阪府 竹内潮花
平然とエロを読むほど女落ち
ふと戀の深さに娘おびへたり

おごられるお茶へクインの様に掛け
濃刺と十九の厄に負けてゐず

大牟田市 高田抱逸
鬧市で資本があるならなと思ひ
調停裁判

勝たしたい被告だけれど曲げられず
一万の算笥今朝から二つ賣れ

岡山縣 大森風來子
ひとり打つ碁石の重み樂しみつ
商賣繁昌現なまを見ぬ日が續き

ミスボリス夜の女に言ひ負けた
訛磨に今日といふけふなめられた

大阪府 水谷竹莊
小説の様に暮せぬ現實さ
神戸市 大鶴喜由

脱いだけ賣つてこの秋どうします
翠蔭へあしたは逢える洗髪

札幌へウンとは云はぬ頼もしさ
齒ブラシがひと巡りする豆の花

二十一父の虚勢がうなづける
愛媛縣 在間小樓

路郎先生に十数年ぶりに
お合ひして(三句)

ステッキの後姿も老ひたまひ
親しさが遠慮の膝をくすさせる

先生も私も手巻煙草です
起重機の力一パイ空をむき

兵庫縣 小澤史葉
姑と新妻春のものを下げ
スト二派に割れて櫻も散り初め

喫茶店內助としては良く儲け
看護婦の手のなんと太い春の日よ

春うらゝ消印忘れた便り來る
大坂市 吉田斜水

貸ボート粉白粉がこぼれて居
木炭車火事を載せてる様に過ぎ

のんびりと風呂屋の春の煙のび
大聲で俺の阿呆を笑ひたい

三合配給皆忘てる衆議院
大阪府 南鼓扇

縁談の話へ母と座をかへる
もう少しつき合つてからと娘は強し

高槻市 久連松春月
襟垢をつけて白粉ぬりたふし
鼻をつくねぎの匂ひの満員車

茨木市 下山清潮
ハンマーとヤスリで暮らす五十年
浪六の馬鹿は奴に惚れられる

残業の煙草ケースは音もなし
年の功ゝは笑つて済ましとき
獨り住むことにも馴れて針もち

吹田市 野本香水
共稼ぎ病身の娘に留守をさせ
紙芝居技能をすてた古い部下

食ふための兒の就職へ法よわし
密豆にごつちよさまなどおかしいよ

長男死亡(四句)
死を意識してか帽子も要らぬ云ひ

入學を待つてたクレヨン新のまゝ
おんぼうの素振り焚火をする如し

全力をつくした醫師に涙あり
高槻市 岡田紫雲

石鹼を賣る三味線を女弾き
久し振り來れば都會のトタン屋根

かけたから鳴る目さましへ疵を立て
賣喰ひのはずの役人家を建て

松山 前田伍健
今年は今半年と思いつゝ職闘帽
良のよう街頭寫眞名乗らさせ

これ以上答えは嘘になります
兄弟をこえた友達ある強み

鯨の配給一人當り何処
清水市 富士野鞍馬

税金は食つてしまつた愚痴となり
特價酒の酒税の高のおそろしさ

天引に觀念してる勤勞者
俳優の納税高をうらやんで

間違つていても納税せよという
三回忌(三句)
大阪府 橋本緑雨

坊さんは忘れもせずに来てくれる
夢にでも話しに来ぬか三回忌
父と呼ぶこどもの居らぬいたましさ



柳樽の剽竊句(中)

富士野 鞍馬

- 六十六編 墨屋の氣ざりたんすを重く持ち (樽三)
- 名物を喰ふが無筆の旅日記 (樽三)
- 口上がすむと西瓜の手を放し (樽二)
- 物差で丈なし木綿たゝかれる (樽二)
- 六十七編 こんな腰ありと出口へ植て見せ (樽六)
- 女房の味は可もなく不可もなし (樽二)
- 六十八編 死すべき時に死せざれば日本ばし (樽二)
- 七十二編 枝豆の流れ矢憎い顔へ来る (樽初)
- 神代にもだます道具は酒女 (樽初)
- 拜領の頭巾梶原ぬひちどめ (樽五)
- 七十三編 ぎきなせへ附木ばつかりくべなさる (樽五)
- 地さわらの頭巾山椒を一本きり (樽初)
- 七十四編 蚊帳へ蚊を入れる娘の髪の出來 (樽七)
- 七十五編 ふうすこはだんく呑むと青くなり (樽三)
- 七十六 かりてきてちようちくを嫁指南 (樽五)
- 七十七編 野がけ道親父の豊後初にきゝ下る乳母晝寝の顔へいとまごひ (樽四)
- 七十九編 そちは二世あれは三月五日なり (樽八)
- 八十編 辻番へ乳母が差圖で御年玉 (樽初)
- 始は初手赤貝は夜なべなり (樽初)
- 外科の供何が委細を開たがり (樽二)
- 八十一編 霜天にいただき二十四文とり (樽四)
- 八十二編 おぬじもしたればせぬかと祇王祇女 (樽五)
- 傾城のみみだで歳の屋根がもり (樽七)
- 八十四編 かさぬ管いくさはないと見切つて (樽三)

- 八十五編 洗い髪これが白髪になろうとは (樽三)
- 大あくび棚の御神酒を見付出し (樽二)
- これ小判ごうぞ一晩いてくれ (樽初)
- 八十六編 東帯で出たしばらくは焼香場 (樽三)
- 八十八編 うららかさしきりに銭がほしくなり (樽七)
- 八十九編 車裡婆ア娘は二俵ふまへてる (樽二)
- 九十編 汝等は何を笑ふと隠居の屁 (樽六)
- 西海の浪にただよふ香つみ (樽三)
- 九十一編 武者一騎虫干の座でしかられる (樽初)
- 九十三編 うけ出して見れば晝間の花火なり (樽三)
- 丸山の別れ一万三千里 (樽八)
- 九十六編 くれるかと思へば鼻をちんとかみ (樽六)
- おさげすみなんすだるうと三會目 (樽三)
- 九十七編 四天王金剛杖で栗をむき (樽二)
- 乙姫はゑてを淺草のりてふき (樽五)
- 元服は異見を添てほめるなり (樽七)
- 百一編 性は善なりもし何か落ちました (樽六)
- ごこで落したとは無理なたづねよう (樽三)
- 祇女が母おぬじはたればしやらぬか (樽五)
- 百二編 せき込んでへば碁火入の火をつかみ (樽九)
- 蚤の子はつめたい乳へぶら下り (樽九)
- 笑ふ門たち開きをする福の神 (樽四)
- 百三編 川越しは蜻蛉のつるむ姿なり (樽三)
- 馬の尻がみけんをかする小侍 (樽三)
- 衣折に一ばい筆筒は空っぽ (樽三)
- 百四編 衣折に一ばい筆筒は空っぽ (樽三)
- 百五編 おなじ夢二十四文も九十奴もかんざしへ店がりをする三の糸 (樽六)
- 百六編 張形が出て母親を又泣かせ (樽初)
- 二の腕を火葬にするは色と欲 (樽九)
- ごのうたが本の亭主になるだるう (樽六)
- 百七編 こんな腰あると出口に植てあり (樽六)
- 百十編 身ころから細帯を取る竹の皮 (樽四)
- 蹴られてはだまつては居ぬ銅たらい (樽三)
- 百十二編 露から秋風まではながい嘘 (樽三)
- 百十六編 風の神背中を洗う御すがた (樽二)
- 百十九編 丈なし木綿物さしてたゝかれる (樽六)
- うたゝれの顔へ草紙の瓦ぶき (樽初)
- 百二十編 鶉の首は案に相違なとへ出る (樽二)
- 百二十一編 千社目の札に澤山糊を付け (樽三)
- 百二十三編 口紅で丹頂にする嫁の鶴 (樽九)
- 鶏も啼け鐘もなれくふられた夜 (樽四)
- 百二十四編 呉服屋は付紐のある反古を出し (樽九)

結核

最新の新治療期

ネオ

ハツモン

コメット

黒田製薬株式会社

醫者よりも禿の力癩になれ
（拾六）
きのふから炬燵にかけてあり
ますよ
（樽三）

百二十五編
落したばごだと無理な尋れ
よう
（樽元）（一〇）

百二十六編
泣く顔があのからいだと女術
言い
（拾七）（樽六）

百二十八編
我扇いただいて立つ小兒醫者
（樽七）
嗟嘆やらでいづれか秋と書て
行
（樽九）

洗ひ髪これが白髪になろう
とは
（樽六）（一九）
南無女房乳を吞せに化けて
こい
（拾三）

百二十九編
結納の鶴の羽青き今年葉
（樽二六）
馬の尻がみけんをかする小侍
（拾一〇）（樽一〇三）

百三十編
孝靈五年あれを見ろ
（拾五）（房三）

百三十一編
川越しは蜻蛉のつるむ姿なり
（拾二）（樽一〇三）

百三十二編
猪牙で小便千兩も捨てやつ
（樽二）

百三十五編
尼寺の入院障程覗かれる
（樽二七）

大名も別に智慧なし川づかえ
（樽二九）

百三十六編
人は人なせことわつてけら
れへ
（樽九）

合の手に一つ舌うつきり
（樽二七）



川柳漫筆は動く(二)

小畑自由朗

驛員の焚火改鉄してくれず
緑雨

緑雨

「おーい、焚火ばつかしごと
らんと、えゝかげんに改札
してんか」

「山猫中や、安い給料でさう
ばい使はんと、そこらに鉄
があるさかいに、勝手に切
つていつてんか、早ういか
んどもう汽車が来るで」

「この千圓の保険金が遣入つ
たら、これで家を建てる筈
だしたなあ」

「うむ」

「あほらしもない、永い歲月、
苦勞に苦勞をして、何んの
爲に懸金をして来たことや
ら」

「今更愚痴つてもしやあらへ
ん、今魚屋の前通つたら、
だしじやこが一袋千圓で出
とつたで、賣切れんうちに
早う行つてあれなど買
て来い」

「へい、家一軒建てられ
るつもの金でだしじやこ
が八百匁買えまんねやな
あ」

「さうして、ラストがトツテ
幽王

「さうして、ラストがトツテ
幽王

「さうして、ラストがトツテ
幽王

「さうして、ラストがトツテ
幽王

「モなのよ」

「まあ」
「こう、彼と彼女がギユツと
抱き合うの」

「まあ、それから」
「さうして二人がどけ入る様
に目を細めてさ、いつまで
もくく」

「あらつ」
「ごめんない」

「うゝん、いゝのよ」
「つい話に身が入りすぎちや
つて」

「いゝのよ」
「あら、あなたの母さん」

「まあ」
「怖い顔してこちら見てるわ
よ」

「困つたわ」
「あたしもう歸えろうつと」

「あんだあー」
「おや、なあんだ、大勢並ん
でるんだな」

「お魚の配給なの、この分だ
といつ歸れるかわかんない
から、あんだ早く歸つ
て、雑炊の、いえ、御飯の
火を引いて、それから物干
の洗濯物を取り入れて、
あゝそれから、坊やお隣
えあづけて居るから連て戻
つて」

「うるせいな」

「うるせいな」

「ついでにお茶をわかしとい
て頂だい」
切り換へた頭の集ふ委員会
牛休

「すべからく民主主義的に
な」

「さうだす、せやなけりや、
吾々が委員に改選された甲
斐がおまへんさかいにな」

「どうだす、はなから一つば
いやりもつて會議を進めた
ら」

「さあ、そいつあ、どうだつ
しやろう、なあ議長はん」

「へいな、それはちいと、い
や、うまい物は宵にくえ
や、いつそ會議はあそ廻し
にして、あつさりど、どう
だすみなさん」

「ウオルサム肥汲さんが買つて
去に 抱逸

「綺麗に肥汲んどきました
で」

「おゝけに、それは憚りさん
で」

「ところで、懐中時計の出
物で、たしかな奴おまへん
か」

「さうだすな、今のところ、
このどびきり物のウオルサ
ムより他におまへんな」

「それなんぼ程しまんね」
「へい、なにしろウオルサム
だつさかいに、普通の物よ
りは十倍程高うまんの」

「へい、十萬圓もしまんの
んか」
「めつさうもない、さうはし
まへんけど、ぎり／＼けつ
ちやく、一文もまからんと

「あ、二万五千圓だんね」
「あゝさよか、ほな、これも
ろどきまつさ」

問違ひを待つとる如し契約書
文庫

「あの山、木を伐り終り次第
土地は返却申可くとの契約
で、わしに仲人さしとない
て、もう一年あまりにない
のに、いつたにおまはん
どないするつもりや、どだ
いもう約束が違う云うて、
旦那からやい／＼と、わし
ばつかりせめたてなはるの
で、わしやもう立つても居
ても居られへんがな」

「やかまし云はんかて伐つて
しもうたら返えす哩な」

「せやかてお家を建てるいう
のとつかかまへん、あの山
とるやさうやないか」

「はいな、何日迄に伐り終り
申可くとは契約書には書い
たらんもんやさかいに」

「呀ッ、そゝそんな無茶な
ことを」

高級化造料容器には断然!

ヤマギンの……

黒硝子

大坂密大造具研
西通一丁自四番
山銀株會社
電話堀川四四七番

民法の解説へ姑ついと立ち 大阪市克己
 皆様の御支援もなくストライキ 同
 公園を抜ける勤に春の風 同
 二人もう喧嘩の出来る仲になり 同
 プラカード今にも殺されそうに書き 同
 ハローハロージープの好きな子どもたち 愛媛縣大八
 豫算審議會終つて後は御安會 同
 夜の女みんなタバコの好きな唇 同
 重役の眼に勞組がまた會議 同
 ふしくれた手でネクタイを持てあまじ 岡山縣笑泉
 村芝居光秀の顔で父歸る 同
 戀愛も忘れてただ／＼生きる道 同
 心臓の弱い所もある闇師 同
 吳佐世保今は平和のドラが鳴る 大阪市梅里
 あれからの野井戸怪談じみてみえ 同
 鉄だけは一人前の未生流 同
 かけひきのついた時計で起こされ 同
 おもちや屋の刀のなげにき氣付き 堺市松雄
 根のよい自分にあきれる待呆け 同
 デッサンは邪魔くさそうに画いたやう 同
 お役所も有料自轉車預り所 同
 阿呆なこつちやと思えまゝ寶くじに頼り 石川縣義風
 こんどは春が木の芽を育てる番 同
 あのぼくが父の戀人おかしかり 同
 農相と藏相をきく父でした 同
 支那料理どちらを見て赤い壁 大阪市茂同
 奈良行き少し覺悟をして出かけ 同
 御遠忌で救はれる氣の御本山 同
 出版屋繪描きパンパン色で食ひ 同
 俳人の放送がある雨の夜 愛知縣可香
 ハンカチを唾へて立てば拗ねたら 同
 定紋のある絆纏で花を掃き 同
 ぬかるみを工場の遠い愚痴になり 同

削うて来た蟲鉛筆に潰される 岡山縣弓削平
 庭の柿も豫算に入れる暮しなり 同
 灰皿も手頃の位置に置いて病み 同
 仲裁が一番大きな怪我をする 同
 老眼鏡腹を立てさす記事ばかり 石川縣光郎
 洋装で来ればよかつた向ひ風 同
 暇つぶしの内職ですは手を止めず 同
 オールドミス見合の席もよく喋り 同
 眼にまるとステッキで来るテロリスト 大阪市ひさみ
 絶景へ立てば小さき吾が姿 同
 啄木の本を内科で忘れて来 同
 又産んだのかとお祝くれぬなり 同
 この話題亂歩宇陀兒に頼まんか 宇部市栗美
 哀愁もなく孤兒院の櫻咲き 同
 春うらら風と言ふ字尋ねられ 同
 春耕の僕に日輪大いなる 松江市孤呂二
 芝青く僕を誘惑せむとする 同
 松ひよろ／＼こゝは觀光地帯なり 同
 君々と言つた男が新課長 大阪市三郎
 父重態外は彼岸の人通り 同
 政令に祇園の春のまだ遠し 同
 輪タクに乗つて大金無事歸宅 大阪市水滴
 満員車ひとの汗にも汚される 同
 交替に寫して奈良の鐘を撞き 同
 落ちぶれた今算盤は手慰み 神戸市鐵三
 外交の地均らし海を隔つのに 同
 仲直り熱いお茶など入れようよ 同
 強盗によく似てゐるとひげをそり 高槻市河童子
 犬が居て這入りかゝるミスポリス 同
 歌舞伎座の看板だけは見ておこう 同
 お喋りの過ぎたに氣づくお嬢さん 兵庫縣花子
 セパートの眼に初夏の色もゆる 同
 女ひとり住めば二號の様に見へ 同

光陰も女の子にて矢の如し
 があるので創作的價値が多小低く
 見られなければならぬと思う。然
 し、これは單なる懸案というには
 惜しいほど、ウガチの進んでいる
 句で「白粉の下は」の語にキケン
 の重みがある。「光陰矢の如し」
 の成語にたよつた弱さを感ずるの
 は川柳人だけのものであらう。

想ひ出の句

石川縣 前田 義風

雨の夜、整理する書棚の中か
 ら、後生大事にしまわれていた大
 阪市街地圖が二枚、電車地圖が一
 枚、京都市街地圖、電車地圖が出
 てきた。御大典當時の京阪時代の
 想ひが果てなく續く。夢を追ふ昔
 の若さがなつかしい。
 その頃の私は川柳を作句しなが
 ら川柳をみくびつていた他人に川
 柳する事をひげしていた。今にし
 て思えば當り前の様だつたともい
 える。それから二タ昔。だのに川
 柳が詩であるとかないとか。地球
 がぐる／＼廻つたけれど、川柳は
 川柳である。私は今も川柳を愛す
 る。
 想ひ出の大阪市街地圖が古り

痛恨の柳

吳市 林野 魅光

ふと耳を澄ますと、雀のさへづ
 る聲がする。靜かな朝ではあるが

ごんより曇つた影は病室に掛け
 てある果實の油画迄も暗くして
 ゐる。寂しい朝!! 「ねる貴方、
 大丈夫でしょうか?」昨夜より急
 變した愛兒靖志の看護に不眠不休
 である妻の可津枝は僕の顔と愛兒
 の顔を見くらべて悲痛である。頂
 度朝の診察が初まつた、折目のつ
 いた純白の診察衣を身に纏つた主
 治醫の細長い顔が見えて型通りの
 診察が初まつたが其の顔も眞剣で
 ある。

醫師は何事か看護婦に命じたら
 しく、一禮した看護婦は靜かに部
 屋を出て行つた。

漸く葉房を揃えた柳の若芽が窓
 から顔を出してゐる、「先生如何
 でしょうか?」たまたまなく口をあ
 けた妻は不安の眉をひそめて愛兒
 の顔をジーンと見守つてゐる、「腦
 膜を起してゐるから、今の所な
 んとも言へないが出来るだけの手
 當はね」一瞬沈黙が續いた。
 靖志は今年四つの子可愛盛りであ

品質優良
 先シンプ
 シンピ
 ムクリツ
 ベ針セ
 立川ペン先製作所
 上野市

口笛吹けば 残る 青春 大阪市葉光
 日食の物干へ縫ふ手休めて来 同
 麥賣りに来る半處女のたくましさ 同
 ミスボリス好きなお方がないでも愛嬌嬌曉 明
 廣告を信じ切るのも女なり 同
 鶏を人の言葉で叱つてる 同
 しんがりやをまとめて妻はついてくる 兵庫縣柳 風
 賣る禮服から出た思ひ出の昆布 同
 靴磨どの子も不良じみて見え 大阪市定 美
 おろされた籠へ夏が来たような 同
 小切手よお前木の葉に化けるなよ 京都市海 子
 ラブレター 檢閱官が先に読み 同
 リンタクを降りた素足の美しく 大阪市可津美
 引揚の誰か故郷を思はざる 同
 花活ける時だけ娘らしくなり 神戸市美代子
 御冗談ばかりおツしの手が温くし 同
 ドンキホーテ春の陽光へ飛で出た 松江市風 子
 サラリーの生活石鹼の泡に似て 同
 知つてはるくせにちやきり言わせる 氣兵庫縣萬龜子
 仕合せな戀を包んで去ぬ蛇の目 同
 停電の街へ按摩が稼ぎに出 大阪市場 人
 スリの目が光る鞆のふくれやう 同
 嘉六さんやたらに金をくれたがり 大阪市春 枝
 不斷着は街頭寫眞よけてゐる 同
 シンデレラの幸あれ幼き看護婦に 貝塚市一 郎
 家なくて何んの結婚自由ぞや 同
 俗も凡夫呪を授け終れば愛嬌縣 椋 人
 足らぬとは云はないも母の慈悲 同
 零落の身が伸びゆく子にも恥かしく 大阪市葉菜子
 安い〜と言の〜映画には出かけ 同
 春日遅々として一匹も釣れず 岡山縣北 路
 網もつて出たまゝ畫を忘れた子 同

満員車まだ此の上につめる氣か 大阪市良 子
 花むしろ一升瓶が一三本 同
 女事務まぶしき視線うけて書き 京都市競 花
 戀文の長さへ今日も遅刻する 同
 百姓をしますと笑つて汽車の窓 鳥根縣米 市
 みじか夜の夢をのつけた古壘 同
 破顔一笑田植の雨が降る 岡山縣七面山
 春の日に檢事冷たく論告し 同
 ネクタイも結べそうにない事を書く 長崎縣鈍 巖
 嫁いだと言ふ眼で顔を眺められ 同
 春の雨歌劇雜誌を開いて見 大阪市花代子
 朝を出る眼鏡タオルで拭かれてゐる 同
 責任を問へば女は寝てしまひ 愛媛縣草 石
 思索して居ればどん底まで落ちる 同
 ありし日の娘閨屋になつて来る 豊中市柳 堂
 たけのこも盡きて閨屋へ轉落し 大阪市柳太郎
 觀音にどこやら似てる彼女です 和歌山惠 風
 口笛のぶと恥しい身分なり 松江市快 哉
 ラツシユアアアアが顎の下に觸れ 大阪市桃 村
 事務の眼に目高うれしく泳ぐなり 大阪市定 花
 黒鯛の刺身富山の旅日記 岐阜市周 峰
 晩年を賞めて歸らず辻易者 大阪市恒 良
 全快の足へ磯砂さからはず 愛媛縣都 仙
 かたつむりあれもときどき行つて居る 岡山縣半
 籤醫者でせうかと脈へ愛想よし 愛知縣吐 平
 麥笛を吹いて共學の愉しもう 大阪府さきはち
 讀みにくい文字で結構母の文 大阪市靜 花
 シペリヤの土の香のする靴をはき 高槻市公 臣
 女中まで財布に鈴をつけてゐる 大阪府春 人
 鯉職閨屋の庭をせまくする 吹田市寛 人
 説教々々また不氣嫌な兄に逢ひ 高槻市雀 葉
 煙草代と云ふボーナスへ腹が立ち 大阪府花 笑
 立讀を本屋はたきで追ひちらし 高槻市枕 流

る。昨朝迄は妻と良く話をしてゐ
 たが昨夜から急に容体が變り全然
 聲を出さなくなつてしまつた。
 寢臺の上には色々な玩具が淋し
 そうに並んでゐる。ドアをノック
 して看護婦が這入つて来た。空
 の注射器と何か皿の様な器物を醫
 師に渡した。香椎の液を取るの
 である。醫師が香椎に針を立てると
 「いた〜い」と胸かな聲で叫ん
 だ!! 可愛想で見ては居られな
 る。妻は寢臺に臥してすゝり泣いて
 ゐる。
 僕は子供が動かない様に身體を
 つかまへてゐるが、とめどもなく
 流れ出る涙をさうする事も出来な
 かつた。夕方になつて更に病狀は
 悪化した。僕はもう駄目だなと悟
 つた!!
 それは實に悲壯である!! 胸を
 裂く思ひがする。看護婦は酸素瓶
 を抱へて来た。然し子供の顔色は
 次第に悪くなる様だ。
 食鹽注射器が運ばれた。とても
 見ては居れない!! 僕はもうたま
 り兼れて「先生もうとても駄目だ
 ろう」と想ふのですが、もう
 あまり痛む目をさせない方が……
 ……」と言ふ言葉の終らない内に醫
 師は「いけない! 其んな事でご
 うする!! 勿論駄目かも知れない
 ……」が然し僕としては出来得る限
 りの手段を構はなかつた。あんなに
 いたい。兎に角病人は僕にまかして貰
 いたいね」
 醫師も一生懸命だ!! 僕の言を
 一擲にはれつけた!! 「そうだ!!

それは「そうだ」僕はもうなにも言
 へなかつた!! 唯苦しうに吐息
 する愛兒の顔を見つめて歎息せざ
 るを得なかつた。
 外は少し風が出た様だ、柳の葉
 が窓をざく〜た〜いてゐる。子
 供は目を閉じたまゝ安らかな吐息
 に變つた!! 呼々可愛い、生命
 よ!! 可愛い、眸よ!! もう一度
 明けて呉れ、もう一度!!
 「靖志……」靖ちゃん「愛らし
 い口元!! 可愛い、兩の手……
 足!! 急に妻は子供の頬に頬を寄
 せて我が子の名を呼び續けた!!
 「靖ちゃん靖ちゃん母ちゃんも後
 から行くからね!! 必ず行くわ、
 靖ちゃん待つて〜れ!! 母ちゃん
 も行くわ」僕は想はずギョットし
 た。
 そして無意識の内に妻の顔を見
 た!!
 蒼白にした顔……真剣な口唇!!
 妻の今の言葉は只其の場限りの子
 供だましの言葉にしてはあまりに
 も真剣だつた!!
 呼々!! 窓外は雨と變つたらしく
 一滴!! 二滴!! 三滴!! 美し
 い水玉が窓硝子を濡していつた。





川柳と私

野村胡堂

東大の法科に居る頃私はフランス語の法律の本の下に、「柳樽」の活版本の綴をバラバラにほぐしたものをに入れて、法律の理論と江戸の風俗詩とを適當に見比べ乍ら、不思議な勉強をしたものであった。

それはもう四十何年か前明治四十一、二年頃のこと、その頃我々の手に入る「柳樽」の活版本は、四六版サラサ表紙の十七篇本（橋南堂本）たつた一種であつたと思ふ。（國書刊行會本の六十編本の出たのは大正三年であつた）大正四年大患で入院した時、私はフト「柳樽」を思ひ出して、同じ川柳好きのY君に頼んで、昔なつかしいサラサ表紙の十七篇本を手に入れて貰ひ、苦熱と闘かひ乍ら、毎日それを何頁づつか読んで行くのが、病院生活の中のためらい楽しみであつた。

大正六、七年頃私は報知新聞の社會部長に担がれ、私の案で新聞の三面一隅に「時事問題讀込の川柳欄」を設け、私自身が選を引受けて、それが實に二十五年も續いた。一時故谷脇素文氏の繪を入れ

たこともあり、青木武雄君が代選したこともあるが、大体私が選を續けたことに變りはない。

「時事川柳」に對しては、川柳人達から支持もされ反對もされたが、私は風俗詩であると共に文明批評又は社會批評としての川柳の大きな役目を信じて居たので、贊否いづれの批評にも耳を傾けなかつた。唯私は長い選者としての經驗の間にも、一句も川柳を作らなかつたことは事實で、「作句せざる選者」として、新聞記者的な極めて特殊の存

在を續けたのであつた。二十五年の間、報知の紙上に現はれた時事川柳の中には、後世に遺さるべき名句も少くない。大正十二年關東大震災の直後、一松子の寄せた句であつたと思ふが

日本橋廣重の見た富士が見えなどはその珠玉吟の一例である。報知新聞の廢刊と共に、私の川柳の選も中止され、私は全く小説の作家として書齋に引籠つた。が、川柳道樂は決して中止したわけでは無く、私の圖書室には年と共に柳書がかはつて行き、私の就寝前の漫讀の書は、相變らず十中八九は柳書で占めて居る。

和田萬吉博士の蒐集した「やなぎ樽」百數十冊を手に入れた。紅いリンゴの句と、きつ薬の香りの中に包まれて眠つてゐられた瘦せ細つた襟を掻き合せながら平常と少しも變らない口調で話して居られた。それでゐる生命の盡きて行く事を豫期してでも居られる様に、死と言ふ淋しい言葉を幾度も口にされてゐた。そして其の言葉の度にその言葉の淋しさ

に入れてから、私の川柳熱は又一段と熾烈になつた。わけても私は毎夏二ヶ月の輕井澤山莊生活は、殆んど古川柳と四つに組んだ生活だと言つても大した誇張では無い。

私は川柳作家でもなく、川柳研究の専門家でも無い。私は唯川柳の持つ詩味とその洒脱なユーモアと、そして江戸時代の風物と人情に、川柳を通して限りなき憧憬を持つてゐるに過ぎないのかも知れない。

併しこれ丈のことは確言出来ると思ふ。四十六才から小説を書き始めた私が、好んで江戸時代にその作物の舞台を假りたのは、多年の川柳愛好癖の賜物の一つであつたに違ひないといふことである。換言すれば、今日の私の米櫃を賄つて居るのは、何ん

嗚呼波矢子 奥さん

竹内潮花

五月一日の夜私の耳を驚かせたものは鳩花からもたらされた紫香の奥さんの亡くなられたことだつた。啞然とした私は妻と共にその病床を見舞つた日の事を思ひ浮べた。あの日は良く空の晴れた春にはめずらしい花日和だつた奥さんとは

二十分ばかり枕許に坐つて話してゐた。紅いリンゴの句と、きつ薬の香りの中に包まれて眠つてゐられた瘦せ細つた襟を掻き合せながら平常と少しも變らない口調で話して居られた。それでゐる生命の盡きて行く事を豫期してでも居られる様に、死と言ふ淋しい言葉を幾度も口にされてゐた。そして其の言葉の度にその言葉の淋しさ

に強いて微笑を見せ様となさる努力は余りにも痛々しかった。永い間の病苦と闘ひつゝ、二人の娘と夫のために飽迄も生き様とされる

毎日の喧嘩に母は笑ふだけ土嗅い姿で母は迎へに出心配にまた心配のふへる母腕時計腕へすべつたまゝ出かけ口笛へ犬は小溝を越へてくる

と學生時代フランス語の法律書の下に忍ばせて讀んだ「柳樽」のお蔭であつたのである。— 東京都・作家 —

喫茶みどり

清談・商談・お待合せに
みどりでの商談
運が向いて来る
上六交又點西北角



いのちある句を創れ



投稿清規

用紙は原稿用紙文字を正
確に開催月日及場所記入
切は毎月廿五日投稿先本社

風竹 追悼川柳會 (本社)

六月六日の午後一時から、一運寺で古
川風竹・宮岡白峯兩君の追悼句會が開催
された。會場の卓上には院主の心づくし
の木蓮の大輪の香が漂ふ。句の披講後、
今は亡き風竹・白峯を語る路郎主幹の眼
には白いものが光つてゐた。綠雨君をは
じめ白峯君の同僚の姿も見えた。五時す
ぎ盛會裡に散會。

出席者 路郎・草々・風路・水客・克己
綠雨・美奈子・好郎・水月・野介・鈍太
無人・種美・香林・圭井堂・鳩花・鳥莊
潮花・栗・翠光・醉月・竹莊・靜一路
みひる・柳三・千舟・文蝶・亞鈍
没食子・翠露・幽王・霞乃・小松園・
茂・小柳子・小雅子・生々庵・琴水・
美水・白柳子・P. o.

兼題「形見」 麻生路郎選

そのまゝ父の形見のズボン履き 定 美
藝人の形見浮世の子が一人 茂
泣いてくもった形見も米にかへ 美奈子
戦死する兄の形見のウオルサム
忘れ形見の聲までも似て 葉光
呉れるなら何でも欲しい形見分け 圭井堂
繪本讀む忘れ形見に胸せまり 種美
せめてもこの形見句集の中の子 没食子
奥さんの形見へ女中泣きくづれ 鳩花
もう秋の形見が似合ふ歳になり 扇
酒機嫌で書いた色紙が遺品なり 千舟
清貧の亡父の形見は古硯 鈍
シベリヤの形見母子へ届けられ 野文
椿咲けわすれかたみの嫁ぐ日を 介蝶

時價言ふて形見の品を分けて呉れ
戦争の形見のような靴をはき
懐しむ手垢形見と言ふ詩集
形見わけネクタイ一本とごりら
なんにもありせんあの子だけが形見です
思ひ切つた形見を金にしてす
形見だけ残してタンス空になり
見て貰ふ様にお墓え子を連れて
形見分みんなにくれる程儲け
形見分けごころかみんを喰べて死に
先生の形見に欲しいお嬢さん

兼題「立話」 橋本綠雨選

立話し呑む持金のさざり合ひ
立話奴豆腐の鉢をもちかへる
立話ごうやら物に成つたらし
立話鉛筆を出す用があり
半分は電車にのせる立話
ざわめきをさけた二人の立話
立話二階借つてるとは言わす
なるべくは話しともない立話
裏長屋主婦さん連の立話
配給の事にもふれる立話
大臣に智恵をつけてる立話
雨模様になつて別れる立話
立話だけですませぬ貸しがあり
身振手振おしとおとの立話
自轉車の方がいらだつ立話
立話背の子供が女また話し
さよならをしてから女また話し
薬びん下げて氣になる立話
立話の一人は塵取もつてゐる
立話つれをうつかり忘れられ
あくる日に死ぬては知らぬ立話
横町へそれて二人の立話
立話スターやつぱりいよいよ
自轉車のすみで儲かる立話
自轉車に叱られてゐる立話
トラックが通り立話後へより
追ひかけて母は名残りの立話
立話へチマの影へ誘ふなり
ストのピラ半分めくれ立話

兼題「面影」 武部香林選

面影を胸にステツプ夜を縁ぎ
麗人の面影もなく子澤山
水客 同光 翠郎 好鈍 美奈子 正夫 草々 綠雨 千舟 茂
時價言ふて形見の品を分けて呉れ
戦争の形見のような靴をはき
懐しむ手垢形見と言ふ詩集
形見わけネクタイ一本とごりら
なんにもありせんあの子だけが形見です
思ひ切つた形見を金にしてす
形見だけ残してタンス空になり
見て貰ふ様にお墓え子を連れて
形見分みんなにくれる程儲け
形見分けごころかみんを喰べて死に
先生の形見に欲しいお嬢さん

席題「夏服」 菊澤小松園選

夏服も先生らしい見だしなみ
ワンピースかき切れない蚤の跡
篩道みな夏服となりまいえず
夏服に替へて落つく久しぶり
夏服のひざに氣兼ねな兒を預け
夏服は短かくなつて子は達者
夏服をぬげばうちわの風となり
夏服は去年の埃ついたまゝ
服を片手にアイスキング持てる
新調の夏服スナツア見逃さず
夏服の風しあわせな父であり
夏服で坐れば妻の膝若し
夏服の白さが眼立つほどにやせ
納得をさせて夏服子にゆすり
夏服の世に遅れた仁丹はげの早さ

席題「新刊」 正本水客選

新刊が次ぎ次ぎ欲しい娘なり
新しインキが匂ふ恩師の著
新刊の雑誌女の顔ばかり
退院間近し新刊書の香ひ
御見舞に趣味の違つた新刊書
新刊になつてもドストエフスキ

阪田膽寫版

大阪北區芝田町二五
株式會社 阪田商會
電話 島一六三九番

新刊が安く買われる古本屋
先生に聞いた新刊みつからず
新刊の誤字を新刊しう讀み
べーパナイフ仙花では氣分
欲しくない新刊ものが並んで
新刊の序文に恩師の名を見つけ

網棚にぶら下る程詰め込まれ
網棚に乗り度いほごの満員車
檢札へ棚の上からぬつと出し
北陸の汽車網棚は潰れそう
網棚を我がもの顔にウルサ型
網棚を氣にして男氣にかゝり
網棚へ米と炭とがひこめくよ
網棚の塹道立ちのまゝに揺れ
網棚の上は闇やの一人占め
もう棚に乗せる余地ない夜汽車行
網棚ののらぬ荷物を持って余
網棚をば逃がれ棚の荷輕う持ち
網棚は客席よりも目白押し
網棚へ荷物をあけてから汗を拭き
網棚の破れが風と戯れる
網棚の上は鶏下はれぬ
網棚をすてに闇屋が占領し

山房偶會(奈良縣)

五月廿九日夜 於不朽洞山房

湯豆腐でホンの一本だけの年... 豆・腐・漿

川 濱寺支部句會(堺市)

五月八日午後六時 於 長徳寺

素肌・アル中・神主... 素肌・アル中・神主

川 大牟田支部句會(福岡縣)

五月廿日 高田抱邊報

噂・喫茶店・盲判... 噂だがと父の異見は切り出され

噂ぐらいあつてもいゝと娘を思ひ... 喫茶部にしては夫婦の氣で戀ひ

小林不浪人主宰

月刊讀物

四六倍版・定價二〇圓

隨筆・漫筆・小説・コント・実話... 肩のこらない退屈凌ぎの雑誌

懸賞川柳募集

青森縣黒石町驛通り

月刊讀物社

川 久賀支部句會(山口縣)

五月十六日 於路三居

夜・幸・樂し

山の灯はなつかし先祖なつかし... 歌へか舞へか同窓會の席

掌に樂しき紅を溶く日なり... 四月十七日 竹内潮花報

川 日立櫻島句會(大阪)

四月十七日 竹内潮花報

春が来て待つて様になりに... 春はよし祇園木屋町先斗町

相撲・鯨・祭

素人の相撲喧嘩のようになり... 五月十六日

DONの夕(大阪)

五月廿五日 於ドン喫茶店

葉櫻の頃に割勘言うて来る... 葉櫻の下にちぎれている馬券

柳人交中暑廣告募る

締切迫る!!

★一と口金五十圓... ★原稿締切は七月廿五日限

川柳雜誌社

句・會・部

×句會へ出席を希望される方は川柳雜誌社内句會部案内係宛に市込んで下さい

不朽洞會から

日に月に會員が殖えてゆく。
今、會は發展の一路を邁つてゐる。うれし極みである。川柳につながらる縁は深い。師弟の繋ぐ手は美しい。川柳によつて正しく歩まう。生活の道を。朗らかに生きやう、短き人生を。

▼宮田不二氏(旭川)から「北海道は何んと云つても五月十二日にお花見と云ふまんくでいい處です。五月から十月まではいい氣候ですがあと六ヶ月が寒いので家内から苦情ばかり聞かされて居ります。ゆく／＼は又内地行になるかも知れませんが動くのがおつたうなのでする／＼の形です。」との頼りがあつた。▼戸倉普天氏(丹波)六月の二日三日に丹後の宮津へ、橋立、文珠、成相山に巡

遊され「天橋に誰れ始めしぞ股のぞき」を寄せられた。▼尼祿之助氏(出雲市)五月廿六日に徳山市の博覽會を視察後、岡山市を視察して歸雲された由▼北川泰集氏(滋賀縣)は近く大阪鐵道病院の内科副院長として復歸されること
▼武部香林氏は十三橋署管内で募集された防犯標語の審査委員会の委員の一人として五月廿日審査をされたこと▼徳永雅美氏(兵庫縣)は四月十四日に三女を儲けられた▼岩崎柳路氏(兵庫縣)は目下病院中である一日も早く快癒を祈る▼水谷鮎美氏(尼崎市)は六月五日、四女啓子さんを儲けられた▼木下國王氏(大阪市)方では六月六日長女を擧げられた▼國弘牛休氏は藤曲驛長から下關驛迄轉掛主任に榮轉され五月二十八日に下關市上新地町小門鐵道官舎三ノ一へ移られた▼蛭子省二氏(愛媛縣)から「頭を切替よとは自他

口には致せ共私共の年齢上から此頃の物價は仲々に呑み込め申さず殊に山奥の農村の日常に於て然りに候」の來信があつた▼中西おさむ氏(名古屋)は東寶映画に勤務、首切り問題で組合側と会社側との中であつて日夜苦勞、心臓辨膜症で目下静養中とのこと▼小林文月氏(尼崎市)は大阪安全衛生協会主事として活躍されてゐる。

新會員紹介：

◎六月

土井文蝶(大阪市) 路郎主幹紹介

糸本醉月(布施市) 霞乃女史紹介

多田一波(高槻市) 潮花氏紹介

木村孤浪(平塚市) 路郎主幹紹介

◎七月

藤岡至藝瑛 石曾根民郎

井上湧三 中西おさむ

岩崎松代 正本水客

宮田不二 黒川紫香

福田錦夢 竹内潮花

西垣路風 北川泰集

岡村錦風 徳永雅美

山根路風 八竹正柳

川村好郎 尾崎方彦

濱田久米雄 西尾山彦

丹波斗士 櫻川不水

木村孤浪 好崎申水

築山快夢 杉原大研

市場没食子 逸見灯竿

吉田豆秋 清水白柳

須崎豆秋 鈴木九坡

大塚一球(布施市) 潮花氏紹介

小林文月(尼崎市) 以上、路郎主幹紹介

早川聽松(尼崎市) 潮花氏紹介

白牛奇朗(奈良縣) 潮花氏紹介

築山快夢(ハワイ) 魔花氏紹介

山分北路(岡山縣) 久米雄氏紹介

謹んで北陸各地の震災を御見舞申上げます

川柳雜誌社

北陸

川柳人各位

伊賀・伊勢方面へはのりば上六河内・大和方面へはのりばアベノ橋

近畿日本鐵道

川柳不朽洞會

指 導 麻 生 路 郎

贊 助 池 澤 樂 居

長 谷 川 一 徹

笠 原 路 生

高 嶋 米 峰

長 野 晴 濱

藤 村 晴 濱

淺 原 退 藏

末 弘 巖 太 郎

中 田 守 雄

白 川 朋 吉

中 村 祐 吉

高 安 六 郎

藤 村 雅 光

鳥 山 一 步

沖 野 岩 三 郎

龜 井 辰 修

田 村 孝 之 介

高 尾 亮 雄

山 本 雨 迷

安 川 久 留 美

山 路 閑 古

西 島 丸

麻 生 葎 乃

橋 本 綠 雨

高 鷲 亞 鈍

澤 田 四 郎 作

中 島 生 々 庵

奧 村 丹 路

武 部 香 林

戸 倉 蒼 天

岩 崎 柳 路

浪 崎 玲 介

大 西 八 步

福 田 山 雨 樓

寺 井 銳 浪

高 澤 一 浪

石 井 白 面 人

戸 田 北 方

前 山 花 麗

古 川 麗 石

岩 崎 山 石

藤 井 友 郎

內 藤 草 一 郎

藤 岡 至 藝 瑛

井 上 湧 三

岩 崎 松 代

宮 田 不 二

福 田 錦 夢

西 垣 路 風

山 根 路 風

川 村 好 郎

濱 田 久 米 雄

丹 波 斗 士

木 村 孤 浪

石 曾 根 民 郎

中 西 お さ む

正 本 水 客

黒 川 紫 香

竹 内 潮 花

北 川 泰 集

布 川 方 彦

尾 崎 方 彦

關 根 山 彦

西 尾 山 彦

櫻 川 不 水

真 一 笑

鈴 木 石 鹿

高 田 抱 逸

井 村 寒 浪

小 川 恒 明

徳 永 雅 美

八 竹 正 柳

大 森 風 來 子

河 野 甲 東

坂 井 楠 水

村 上 角 堂

水 谷 竹 莊

水 谷 琴 水

小 橋 隆 如

岡 崎 祥 月

弘 津 柳 慶

吉 田 圭 井 堂

稻 葉 鳩 花

小 坂 慈 雨 山

杉 谷 耕 民

増 野 半 休

國 弘 占 休

在 間 小 樓

手 島 清 潮

下 山 秋 花

南 口 鼓 扇

岡 本 紫 雲

土 野 吞 水

井 本 文 蝶

糸 本 醉 月

多 田 一 波

大 塚 一 球

小 林 文 月

路

路

路

路

路

路

路

路

路

路

路



身邊雜記

夏が来ても夏の粧ひもしないで、ひたむきに川柳とつくんでゐる。幾ら暑くても、忙しいので海へも行けない。碧い海を思ひうかべて編輯室に釘づけである。

七月十日は私の誕生日だが、長い間誕生日を祝つたことがない。正に耐乏生活の標本だつた。その代り、こゝとは還暦になるとかで、十一日の日曜には、みんなて祝つてやるとのこと、有難い話だ。

拙著の「新川柳講座」は豫想外に好評で、前例のない賣れ行きである。萬謝。(路)

……動 靜……

▼本社で風竹・白峯追悼句会を六月六日午後一時から一運寺で開催
▼川柳不朽詞会主催本社後援の下に路郎先生の還暦祝賀川柳大会が七月十日正午、道頓堀オメガハウスで開催される、各地からの出席で盛会が豫想されてゐる▼扶桑會屬川柳會が六月三日午後四時開催路郎主幹出席▼川雜濱寺支部六月例会が十二日午後六時開催路郎主幹出席、七月例会は十日午後六時から長徳寺で開催される▼大阪通信病院川柳會は六月十六日午後二時から開催され路郎主幹出席▼南海電鐵川柳會は十八日午後四時十分から貴賓室で開催され路郎主幹出席▼川雜阿倍野支部創立句会

が六月十九日午後六時からフタバカッパ株式会社で開催され盛会だつた。路郎主幹出席▼川雜岡山支部では六月六日禁酒會館で例会を開催▼津倉村公民館文化部(愛媛縣)では五月十六日、川柳作句の研究と講演の会を開催された▼全信州川柳大会が四月廿五日上田で開催された▼「川柳天地」發刊記念全愛媛川柳大会が四月十八日に開催され盛会▼「川柳やまがた」第一巻一號(六月號)が山形縣小松

募 集

課題吟募集

時間表(十句) 福田山雨樓選
(八月五日締切)
支 店(十句) 吉田水車選
(九月五日締切)

每號募集

(毎月五日締切)
近作柳樽(雜吟廿句) 麻生路郎選
川柳塔(雜 詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雜吟を募る。
▼「川柳塔」への投句は不朽詞會員に限る。

町山形川柳會から刊行された▼川柳山脈(静岡縣)發行所は十支尾氏病氣のため志太郡藤枝町大手二四二ノ三橋本たかし方へ變更された▼作家連盟(東京都)では六月廿七日遊谷驛ハチ公像跡ハチ公再建資金募金街頭句会を開催される由▼千石莊川柳會は五月廿二日に開催路郎主幹出席▼日立造船の文化祭(大阪)が五月十六日に催さ

れ川柳大会に路郎主幹が出席された▼ふしみ川柳會(京都市)では六月六日午後六時から川柳三十三の会を開催された▼小女柳會社(新居濱市)では六月十九日の夜若水莊で第十回例会開催▼すげ笠川柳社では相元紋太氏の胸像を頒布、一基三〇〇圓送費三〇圓納期六月中、希望者は犬山町同社▼小倉市鍛冶町五丁目天堂出版社から「マンギア」が刊行され川柳家は魚行、翠屏兩氏が擔當される由▼川雜備前支部(岡山縣)では五月廿二日久米雄居で例会開催▼川柳雜誌社岡山支部の五月例会を廿九日禁酒會館で開催した▼川柳界(東京都)は七月で二周年を迎えることとお欣び申上げる▼川柳美松吟社(愛媛縣)では五月廿二日京都の渡邊極堂氏を迎えて句会開催された▼小松の蘆城川柳社と石川縣川柳文化協會の共催で五月廿三日小松市で第一回石川縣川柳人交歓句会が開催された▼津山香華會(津山市)では五月十八日聴夢、吟一、砂人、文久の諸氏を囃んで句会開催▼前田義風氏(石川縣)は「除草はげむ自らの唄に氣おいつ、」の句を寄せられた。なほ川柳生活廿五年の收穫を整理して句集を編まれること▼三條東洋樹氏(神戸)は東海道五十三次を自動車で行き、鈴ヶ崎、金谷、箱根の山をドライブして得るところがあつたこと▼東野大八氏(愛媛縣)「大洲の鮎は上出来て六寸ぐらゐの大ききで味も上々です百匁八十匁が

相場」との來信があつた。「川雜」を官廳の文化報へ廻覽させてゐること▼西本三笑氏(金澤)から「名古屋で爆死したと思つた廿年前の悪友加香君がビヨッコリ今日來訪、廿年前の師の噂をして交杯してゐます」との來信があつた▼三澤沙風氏(東京都)は五月廿六、七日來阪されたそうであるが時間的やりくりがつかうかつた由▼篠山壽氏(大阪)は無事復員後、關西配電に勤務されてゐる▼東野大八氏(愛媛縣)は六月十七日社用で山道二里半?を自轉車で内子町へ、傍ら蛭子省二氏を訪問された▼榎田竹林氏(静岡市)は三月十九日PKから川柳郷土めぐり第一回を放送され四月三十日に第二回を放送されること▼加茂正一氏(東京都)は四月下旬現代語に關する有益な放送をされたがその翌日から吉野、高野方面の旅をされ、大阪へも立寄られたこと、なほ六月六日に又放送される由▼水村京介氏(奈良縣)が五月九日永眠された行年三十六、謹んで悼む▼前田義風氏(石川縣)は川雜金澤支部一周年川柳大会に出席されたこと▼船木夢考氏(敦賀市)は病氣全快、「木蓮が咲いてるように足袋を干し」の句信に接した▼吉田機司啓

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…

ルモザン錠

45錠入

大阪・武田藥品工業株式會社

發行所 **川柳雜誌社**
〒750 大阪府東區 大坂 七五〇

發行所 **川柳雜誌社**
〒750 大阪府東區 大坂 七五〇

山之内

血压降下に アークレミン

定劑注射

血管アウトルホモンとアミン塩類

山之内製薬

博は市川市市川警防會館内不老閣から「長生きと若返り」を刊行された。定價一六〇圓▼西村山月氏(關ヶ原)は喘息を病んでおられたが五月十三日永眠された謹悼。